

災害文化

多くの日本人は、春、花見を楽しむが、花見といえば、川岸の土手に植えられた桜並木を思い浮かべる人も多いであろう。この「土手の花見」、防災上の工夫だという話がある。花見は春、その前は冬。川の土手は、降霜や氷結の作用によって緩んでしまう(昔ながらの土の堤防の場合)。そこへ、春を挟んで梅雨がやってくる。土手が弱体化したところに増水が重なると、土手の決壊につながりかねない。これを防止するために仕組まれたのが、「土手の花見」というイベントだという。増水時期を前に必要な土手のメンテナンスを、大勢の人間による踏み固めという形で、ごく自然に、かつ、楽しみながら実現しようというアイデアである。さらに、多くの人々が集まれば、補修を必要とする箇所を発見する機会が増えることも計算に入れられている。

●**災害と折りあうこと** 「土手の花見」の逸話は、災害文化を考えるとき、いくつかが重要なことを教えてくれる。まず、「土手の花見」が、楽しいイベントであること

が重要である。花見という誰しも心浮き立つイベントと災害に対する備えとを上手に組み合わせている点に、「土手の花見」の巧みさはある。

災害文化を聞くと、24時間365日警戒態勢、といった情景を思い描く人も多いようだが、こうした態度は長続きしないし、文化としても定着しない。むしろ、豊かな災害文化とは、災害とともに生きていく工夫の集積のことである。つまり、自然の脅威はやり過ぎ、逆に、その恵み(火山がもたらす温泉や洪水がもたらす肥沃な土壌など)は享受しながら、災害と共生するすべのことである。別の



図1 土手の花見

(出典：<http://www.city.okayama.okayama.jp>)

ことばでいえば、災害文化は、自然と真っ向から立ち向かいそれを制圧しようとする「防災」の論理よりも、むしろ、自然と折りあいつつ、それがもたらす災いだけを可能な限り減らそうとする「減災」の発想に近いといえるだろう。

●**継続されること** 「土手の花見」は、毎年繰り返される。梅雨(洪水)という毎年襲ってくる災害に対して、やはり毎年花を咲かせる桜(花見)を対置した点も、「土手の花見」の特徴である。災害はいつやってくるかわからない。しかも、例え

ば、梅雨、台風や大雪などのように、年単位の周期性をもつものもあれば、例えば、地震・津波や火山爆発など、数十年から数百年以上にわたる周期をもつものもある。

したがって、特に後者のタイプの災害に対しては、一時的な教育・学習や備えだけではなく、教育・学習プロセスそのものが何世代にもわたって反復されていくような仕組みが必要である。大災害の直後などに、一時的に人々の災害への関心が高まることがあるが、一時的な興味・知識の高まりだけでは災害文化とはなりえない。この点、「土手の花見」は、ハザード（洪水）とは別の、しかし、それ自体、自然の一部である桜の力を借りて、継続的な備えを実現した点で大変巧みである。

また、近年、「稲むらの火」という津波防災の物語が、インド洋大津波（2004）で被災したアジア各国に、翻訳されて提供された。実は、この物語、1854年の安政南海地震・津波の際、紀伊国広村（現在の和歌山県広川町）で被災した濱口梧陵という実在の人物がとった行動に想を得た小泉八雲が1890年代に創作した話のもとになっている。その後、1930年代に学校教材としてアレンジされ、一時忘れ去られていたものが、今回再び、アジア諸国でリバイバルしたのである。演じる役者が変わっても忠臣蔵が忠臣蔵という物語であり続けるように、時代や文化を越えて長く継続され得る物語素材なども、災害文化の有力なコンテンツとなり得る。

●ソフトとハードを兼ね備えている点 最後に、「土手の花見」がハード（土手、桜の樹）とソフト（花見というイベント）を兼ね備えている点も重要である。文化は、人々の意識、態度、ふるまいはもちろん、道具、慣習、制度といった物理的、あるいは社会的環境も含む総体的なものである。この点、災害文化も同様で、狭い意味での防災意識や災害に関する知識を高めるだけでは、災害文化とはならない。それを文化として安定させ、長期にわたって伝えていくためには、「人が変わっても残るもの」、すなわち、それなりのハードウェアや制度など社会的な仕組みを整備することも重要である。

先に紹介した濱口梧陵は、地震・津波の後、私財を投げ打ち、かつ災害で田畑を失った村人たちを労働力として活用して津波防潮堤を建設している。この防潮堤は現存し、実際、梧陵が遭遇した津波から92年後の1946年、昭和南海地震・津波の被害を軽減した。ハードウェアは物理的被害を減少させ、堤防の上を歩く住民の間では、「これは、ご先祖さんがつくった堤防なんだよ」と物語が継承されていく。ハードとソフトが見事に組み合わさった災害文化である。 [矢守克也]

□参考文献

[1] 矢守克也『〈生活防災〉のすすめ－防災心理学研究ノート』ナカニシヤ出版、2005